

天神山貝塚・山鹿貝塚から出土した貝類資料 ——九州大学総合研究博物館収蔵資料を対象として——

福永 将大*・伊藤 泰弘

九州大学総合研究博物館：〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1
*fukunaga@museum.kyushu-u.ac.jp

要旨：九州大学総合研究博物館に収蔵されている、福岡県所在の天神山貝塚と山鹿貝塚から出土した貝類資料の再検討を行った。出土した貝種の同定作業を行いつつ、合わせて出土貝類の生息域や生態について再検討し、両遺跡における貝類採集活動について考察した。また、貝類資料の一部に関して、放射性炭素年代測定を実施し、両遺跡における貝層形成時期を考える上で重要なデータを得ることができた。

キーワード：九州大学総合研究博物館収蔵資料，資料報告，天神山貝塚，山鹿貝塚，縄文時代

はじめに

九州大学総合研究博物館には、もともと同大医学部解剖学第二講座にあった縄文～弥生時代の遺跡から出土した資料が収蔵されている。長崎県カラカミ遺跡や佐賀県小川島貝塚、福岡県天神山貝塚、同県山鹿貝塚、同県前田山遺跡、熊本県天岩戸岩陰遺跡、同県若園貝塚といった、いずれも1970年代に発掘調査された遺跡から出土した資料で、そのほとんどは貝類・動物骨・魚骨といった自然遺物である。これらの資料については博物館データベースへの登録がなされていなかったため、令和5（2023）年度から整理作業を開始した。本稿は、その整理作業の過程で実施した、天神山貝塚・山鹿貝塚出土貝類の調査分析成果の一端について報告するものである。

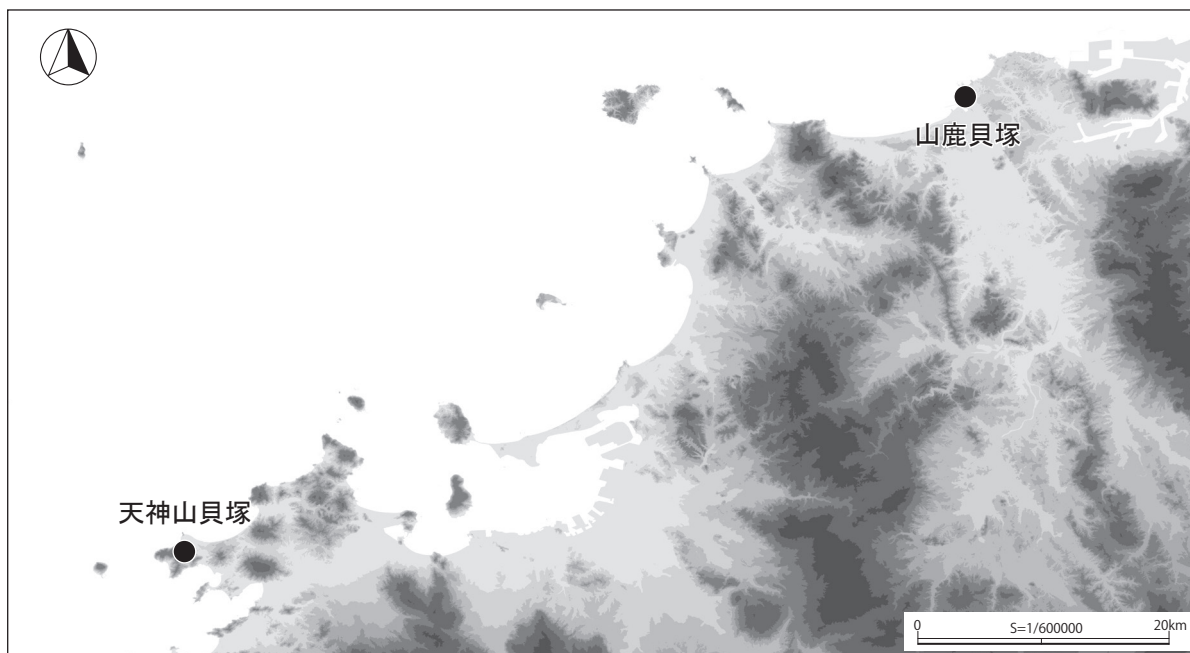
福岡県糸島市に所在する天神山貝塚は昭和49（1974）年に、同県遠賀郡芦屋町に所在する山鹿貝塚は昭和40（1965）年・昭和43（1968）年にそれぞれ発掘調査が実施されており、いずれも既に発掘調査成果報告は刊行されている（永井ほか編1972；前川編1974）。九州の縄文時代貝塚として著名な遺跡で、これまで多くの研究者によって研究対象とされてきており（木村1980・1987・1994；田中1985；山崎1975a・1975b・2007など）、九州縄文時代史を考える上で欠かすことができない遺跡である。

本稿で対象とする天神山貝塚・山鹿貝塚出土貝類は、発掘調査報告書の中で既にデータが公表されている資料と考えられる¹。どちらも資料はきれいに洗浄されており、出土層位・貝種ごとに袋分けした状態で収蔵されていた。既報資料ではあるものの、データベースに登録するにあたって、再度貝種の同定作業を実施することとした。合わせて出土貝類の生息域や生態について再検討し、両遺跡における貝類採集活動について考察を試みる。

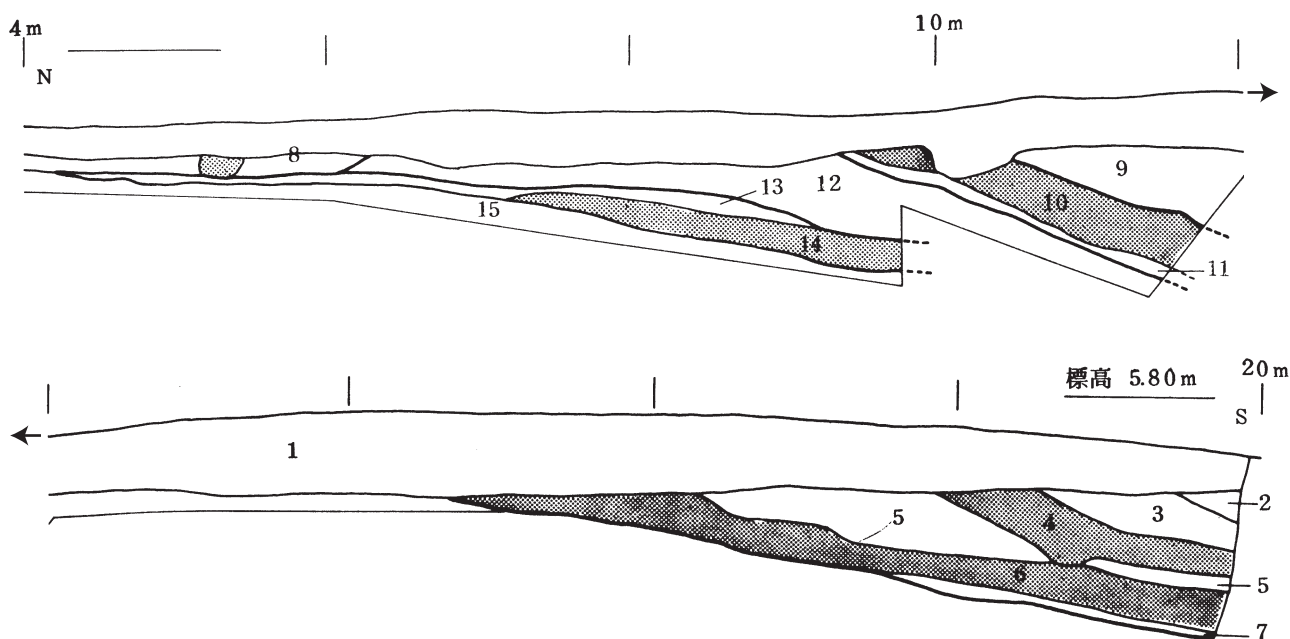
また、貝類資料の一部に関して、放射性炭素年代測定を実施した。山鹿貝塚では出土貝類の年代測定が実施されているが（永井ほか編1972, p.91）、1970年代の分析であり、その精度にはやや不安が残る。天神山貝塚に関しては、これまで実年代データは得られていないこともあり、天神山貝塚・山鹿貝塚出土貝類を対象とした年代測定実施の意義は大きいと考える。以下、1・3を福永が、2を伊藤が執筆し、4については福永・伊藤で協議しつつ執筆した。

1. 天神山貝塚と山鹿貝塚について

まず、天神山貝塚と山鹿貝塚で検出されている貝層の状況をまとめて、対象とする貝類資料の遺跡内での位置



第1図 天神山貝塚・山鹿貝塚位置図



1: 埋土 2: 黒褐色砂層 3: 暗褐色混貝砂層 4: 黒褐色混砂貝層 5: 褐色混貝砂層 6: 黒褐色混砂貝層 7: 暗褐色砂層 8: 褐色砂層
 9: 黄褐色砂層 10: 黄褐色混砂貝層 11: 茶褐色砂層 12: 黄白色砂層 13: 黄褐色混貝砂層 14: 黄褐色混貝砂層 15: 白色砂層

第2図 天神山貝塚 トレンチ東側土層図

づけを明確にしておきたい。

(1) 天神山貝塚

福岡県糸島市志摩に所在する。貝塚のすぐ北側に玄界灘が広がっており、外海に面した場所に立地している。しかし、貝塚から出土する貝類や魚類は内湾性のものが

主体を占めることから、貝塚南東に広がる平地部は、縄文時代には引津湾側に口を開く内湾で、その内湾から主に貝類や魚類を獲得していた可能性が指摘されている（前川編1974）。

昭和49（1974）年に地形測量と発掘調査が実施されている。貝層と遺物の出土状況の把握を目的として、幅1

m, 長さ20mのトレンチを設定して調査が行われた。第2図は、トレンチ東壁の土層図である。発掘調査報告書から読み取れる各層の位置づけは以下の通り。

- 1層：現代の攪乱層。
- 2～7層：混貝砂層と混砂貝層が交互に層をなす縄文時代後期の遺物包含層。特に4層と6層の混砂貝層は、一部で純貝層を呈するところもある。縄文時代後期初頭の坂の下式・中津式が主体で、後期前葉の福田K2式が少量出土している。
- 10・11層：縄文時代前期の遺物包含層。10層は貝層である。縄文時代前期の轟式・曾畑式が出土しているが、出土量は多くない。
- 13・14層：時期の特定が難しい土器片2点のみ出土。縄文時代早期末頃の所産である可能性があるとのこと。魚骨が比較的多く出土している。

なお、今年年代測定を行った試料は、「4層」・「5層」・「前期貝層」とラベリングされた貝類（ハマグリ）である。上述のとおり、4層・5層は縄文時代後期初頭～前葉の遺物包含層であり、「前期貝層」は縄文時代前期の遺物包含層である10・11層に該当しよう。

(2) 山鹿貝塚

福岡県遠賀郡芦屋町に所在する。遠賀川の河口近くに位置し、東西約200m, 南北約70mで細長く、高いところで標高12m強の低い砂丘上に立地する。貝塚の西側は外海に面するが、東側は、縄文時代には古遠賀湾に通じる内湾が存在していたと考えられている（永井ほか編1972）。

発掘調査は過去5回にわたって実施されている（永井ほか編1972；山田・吉田編2002）。博物館に収蔵されている貝類資料には、「2層 Fトレ B貝塚」とラベリングされている。Fトレンチは、昭和43（1968）年に実施された第3次調査の補足調査（＝第4次調査）において設定されているトレンチであり（第3図）、当該貝類資料はこの時の調査で採取されたものと考えられる²。

第4図は、Fトレンチ³西壁の土層断面図である。表土層（I層）を除去すると貝層（II a層～II h層）がブロック状をなして出土したとされている。II a層～II h層で出土する土器に変化はなく、縄文時代後期初頭から後期前葉に位置づけられる土器が出土している。今年年代測定を行った試料は、「2層」とラベリングされてお

り、第4図II a層～II h層のいずれかから採取されたものと考えられる。

これらの貝層の下部で確認されたII i層は、貝をあまり含まず堅くしまっており、炉跡と考えられる痕跡も見つかっていることから、この面が当時の生活の場として使用されていた可能性が指摘されている。

III層からは遺物は出土していないが、このIII層中に、縄文時代後期の堆積層（II層）の最下層から掘り込まれた土壌墓2基（15号人骨・16号人骨）が発見されている。

山鹿貝塚では縄文時代後期以前の資料も出土しているが、発掘調査報告書を見る限り、Fトレンチでは縄文時代後期の資料しか出土していないようである。

2. 収蔵貝類資料の検討

収蔵貝類資料は、天神山貝塚（前期貝層、5層、4層、3層）および山鹿貝塚（2層）から出土した貝類である。資料の同定は、現生貝類図鑑および現生貝類標本との肉眼比較で行った。現生貝類標本として、九州大学総合研究博物館所蔵の佐藤勝義コレクションを利用した。貝類の学名・和名および棲息環境は、奥谷（1986・2000・2017）を参考にした。

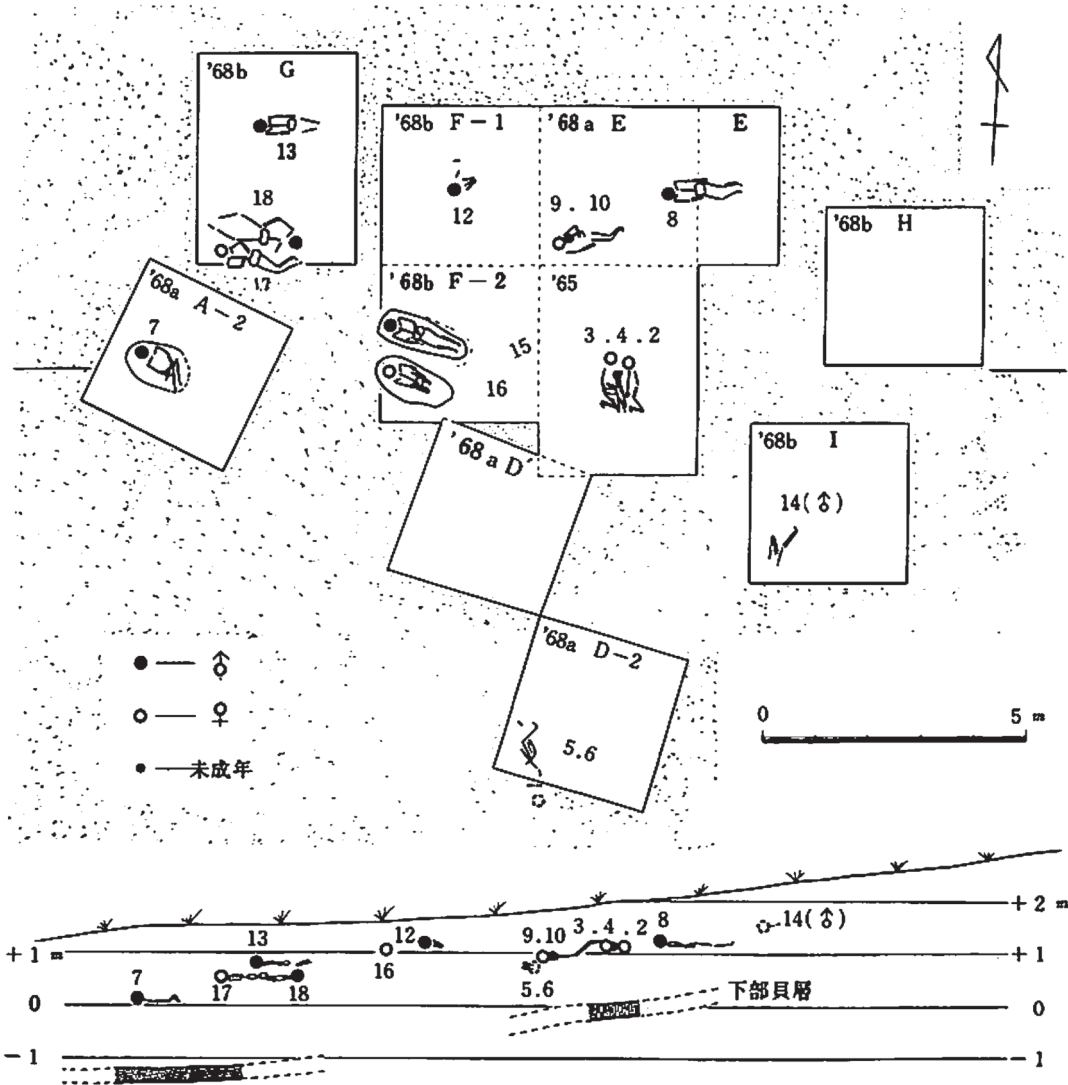
資料の係数は、腹足類（巻貝類）において殻口部あるいは殻軸のあるものを1個体とし、二枚貝類においては左右のどちらかの殻頂部ないし概ね3分の2以上あるものを0.5個体とし、その総数を切り上げた。さらに破片化したものが、多数ある場合は+を付記した。

天神山貝塚および山鹿貝塚から出土した貝類は、いずれも貝殻の溶脱が進んでおり、破片化したものや同定不能なものも多かった。特に、山鹿貝塚からのマガキは溶脱や破片化が著しく計数が困難であった。貝塚各層の同定結果の一覧は、第1表に示す。

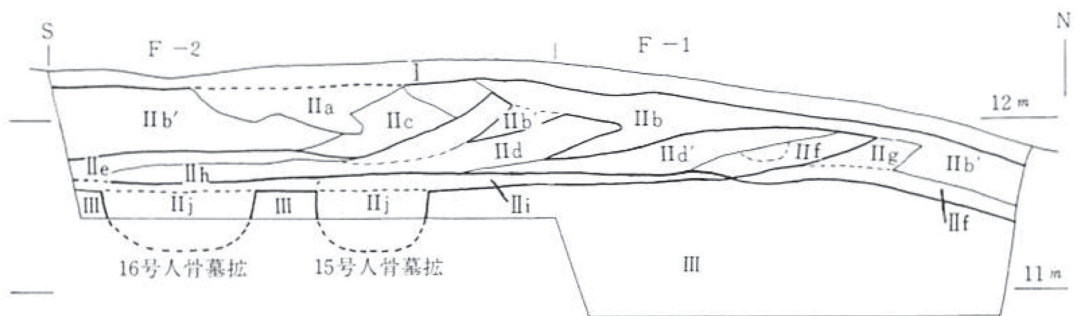
(1) 天神山貝塚

i) 前期貝層 [資料番号：No. 29]

ハマグリが卓越するが、貝殻の総点数が100点ほどで少ない。ハマグリ他、オキシジミ、シオフキ、アサリなど、内湾の潮間帯中下部の砂泥底に棲息する貝類が中心である。それ以外に、サザエの蓋など岩礁性の貝類も僅かながら含まれる。前期貝層を形成した時代は、内湾の



第3図 山鹿貝塚 トレンチ配置図



- | | |
|------|-----------------------|
| I | 黑色砂層 (表土) |
| IIa | 黑色砂層 |
| IIb | 黄褐色砂層 |
| IIc | 混貝(少量) 暗黄色砂層 |
| IId | 破碎貝混褐色砂層 |
| IIe | 暗褐色砂層 |
| IIf | 破碎貝混暗黄色砂層 |
| IIg | 破碎貝混黄褐色砂層 |
| IIb' | 黄褐色砂層 (少量貝が混じる) |
| IId' | 破碎貝混褐色砂層 (黑色を帯びる) |
| IIh | 混貝黒褐色砂層 (A貝層)(完形貝を含む) |
| IIi | 暗黄褐色砂層 |
| IIj | 暗黄色砂層 |
| III | 黄色砂層 |

第4図 山鹿貝塚 Fトレンチ西壁土層図

第1表 天神山貝塚・山鹿貝塚 出土貝類種名表大友遺跡(1)

水深	底質	和名	分類	前期貝層 No.29	5層 No.28	4層 No.27(4)	3層 No.27(3)	山鹿貝塚 2層
潮間帯	岩礁	カサガイ類	腹足綱					3
潮間帯	岩礁	カリバガサ類	腹足綱					1
潮間帯	岩礁	マツバガイ	腹足綱		11	3	7	
潮間帯	岩礁	クロヅケガイ	腹足綱		10	14	8	
潮間帯	岩礁	イシダタミ	腹足綱		39	96	75	2
潮間帯	岩礁	ミミガイ類	腹足綱			2	1	
潮間帯	岩礁	スガイ(殻)	腹足綱	1	25	63	33	118
潮間帯	岩礁	スガイ(蓋)	腹足綱	3	19	24	54	245
潮間帯	岩礁	スソカケガイ	腹足綱		11	7	9	
潮間帯	岩礁	タマキビ	腹足綱		108	92	85	
潮間帯 ～潮下帯	岩礁	レイシガイ	腹足綱	1	4	21	12	4
潮間帯～20 m	岩礁	クボガイ	腹足綱		211	116	109	
潮間帯～20 m	岩礁	ヘソアキクボガイ	腹足綱			30	23	27
潮間帯～20 m	岩礁	オオコシダカガンガラ	腹足綱		4	9	6	
潮間帯～20 m	岩礁	クマノコガイ	腹足綱	1	48	22	15	1
潮間帯～20 m	岩礁	イガイ類	二枚貝綱	1	24	19	12	
潮間帯下部 ～20 m	岩礁	サザエ(殻)	腹足綱		3	15	4	11
潮間帯下部 ～20 m	岩礁	サザエ(蓋)	腹足綱	8	11	25	25	77
河川(淡水)	砂泥底	カワニナ	腹足綱			6	2	
潮間帯 (河口・汽水)	砂泥底・干潟	ヤマトシジミ	二枚貝綱					2
潮間帯～潮下帯 (汽水)	砂礫・泥底	マガキ	二枚貝綱	2			2	181+
潮間帯～潮下帯 (汽水)	礫やマガキ等 に付着	ウネナントマヤガイ	二枚貝綱					42
潮間帯	泥底・干潟	ウミニナ	腹足綱		8	205	112	3

第1表 天神山貝塚・山鹿貝塚 出土貝類種名表大友遺跡(2)

潮間帯	泥底・干潟	ホソウミニナ	腹足綱			75		23
潮間帯	干潟	ヘナタリ	腹足綱		1	112	16	2
潮間帯	泥底	フトヘナタリ	腹足綱		22	135	28	27
潮間帯	転石上	イソニナ	腹足綱			2	1	
潮間帯	砂～砂泥底	イボキサゴ	腹足綱			2	3	
潮間帯上部	砂底	ナミノコガイ	二枚貝綱		4	667	31	
潮間帯上部 ～20 m	砂泥底	サルボウ	二枚貝綱					1
潮間帯～10 m	泥底	ハイガイ	二枚貝綱	2				
潮間帯～20 m	岩礫	カリガネエガイ	二枚貝綱	1	15		2	
潮間帯 ～20 m	岩礫	コベルトフネガイ	二枚貝綱		1			
潮間帯中部 ～下部	泥底	イボウミニナ	腹足綱					15
潮間帯中部	砂底	マテガイ	二枚貝綱			2	9	
潮間帯中部 ～10 m	砂礫泥底	アサリ	二枚貝綱	8	10	147	44	
潮間帯中下部	岩礫底	トマヤガイ	二枚貝綱		2		1	
潮間帯下部	砂底	オキアサリ	二枚貝綱			1	2	
潮間帯下部 ～20 m	砂泥底	ハマグリ	二枚貝綱	49	25	60	33	77+
潮間帯下部 ～20 m	砂底	チョウセンハマグリ	二枚貝綱	1				
潮間帯下部 ～20 m	砂泥底	オキシジミ	二枚貝綱	17	1	134	20	2
潮間帯下部 ～20 m	砂泥底	シオフキ	二枚貝綱	11	7	90	33	
潮間帯下部 ～20 m	砂泥底	バカガイ	二枚貝綱				1	
潮間帯 ～50 m	細砂底	ツメタガイ	腹足綱		3	11	5	
水深約 10 m	砂底	バイ	腹足綱			1		
10 m～以深	細砂底	クダタマガイ類	腹足綱					1

潮間帯中下部の砂泥底に潜って棲む二枚貝類が中心であり、干潮時などに貝を掘って採取していたと考えられる。

ii) 5層 [資料番号：No. 28]

貝殻の点数で見ると、クボガイ、タマキビ、クマノコガイ、イシダタミ、スガイなどの潮間帯の岩礁の表面に棲息する巻貝が多く含まれる。ハマグリやアサリなどの砂泥底に棲息する二枚貝類も含まれるが少ない。その他に、ウニの棘やフジツボ類も見られる。

第5層が形成された時期は、主に岩礁の表面に棲息する巻貝、特に海水に浸からない場所を好むタマキビなどが採取されていたと考えられる。潮の満ち引きの影響を受けにくい岩礁での採取は、干潟での採集に比べて安定していたと考えられる。

iii) 4層 [資料番号：No. 27 (4)]

引き続き、クボガイ、タマキビ、イシダタミ、スガイなどの潮間帯の岩礁の表面に棲息する巻貝が多く含まれる。潮間帯下部のサザエやその蓋も見られる。また、内湾の潮間帯の砂泥底の表面に棲息するウミナ類の巻貝や、アサリ、オキシジミ、シオフキ、ハマグリなどの内湾の潮間帯中下部の砂泥底に潜って棲息する二枚貝も非常に多い。また、外洋に面した砂浜の波打ち際に棲息するナミノコガイの二枚貝が点数的には卓越する。その他に、ウニの棘やフジツボ類も見られる。

4層では、引き続き岩礁に棲息する巻貝が多く見られるが、一方で、内湾の潮間帯中下部の砂泥底に潜る二枚貝類が非常に豊富になる。さらに、注目すべき点として、外洋に面した砂浜に棲息する二枚貝のナミノコガイが大変多く含まれている。これらの特徴から、この時期には、岩礁だけでなく、干潮時に露出する内湾の干潟や外洋の砂浜でも、特に二枚貝類を中心に採取していたと考えられる。

iv) 3層 [資料番号：No. 27 (3)]

引き続き、クボガイ、タマキビ、イシダタミ、スガイなどの潮間帯の岩礁の表面に棲息する巻貝が多く含まれる。また、内湾の潮間帯の砂泥底の表面に棲息するウミナ類の巻貝も多く含まれるが、4層と比較すると少ない。また、アサリ、ハマグリ、シオフキも含まれるが、4層と比べると大幅に少ない。その他に、ウニの棘やフジツボ類も見られる。

3層でも、岩礁に生息する巻貝は多く見られるが、4層で見られるような干潮時に採取できる二枚貝類は少な

くなっている。これは、岩礁での採取が継続される一方で、干潮時の採取が減ったことを示唆している。

v) 小結

天神山貝塚の5層、4層、3層の貝類構成を比較すると、潮の満ち引きの影響を受けにくい岩礁表面での貝類採取は、比較的安定して行われていたことがわかる。一方、4層に見られるように、二枚貝類は堆積物中に棲息するため、干潮時に採取する必要がある。潮位の変化に大きく左右される。そのため、これらの層の違いは、採集時期の違いを反映している可能性があり、特に4層は、干潮時の潮位が大きく低下する春から夏にかけて形成されたものではないかと考えられる。

(2) 山鹿貝塚

i) 2層

汽水域で潮間帯の干潟や砂泥底に棲息するマガキが貝類の大部分を占め、カキなどの表面に付着するウネナシトマヤガイが特徴的に含まれる。また、砂泥底の表面に棲息するウミナ類や、砂泥底に潜って生活するハマグリも含まれる。貝類の点数で見ると、スガイなどの潮間帯の岩礁の表面に棲息する巻貝や、潮間帯下部のサザエの蓋が多く確認された。

2層が形成された時代には、マガキの群集またはカキ礁が形成された干潟が存在したと考えられる。当時の山鹿地域は、遠賀川河口に位置した大規模な干潟が広がっており、カキなどの採取が行われていたと推測される。さらに、岩礁地帯に棲息する貝類も多く見られ、現在も遠賀川河口東側の岩礁でサザエなどが採取されることから、当時もこれらの岩礁地帯で巻貝を中心に採取していたと考えられる。

3. 収蔵貝類資料の年代測定

天神山貝塚・山鹿貝塚から出土した貝類を対象に、放射性炭素年代測定を実施した⁴。天神山貝塚出土貝類から6点、山鹿貝塚出土貝類から2点を試料として抽出しており、第2表は、年代測定結果を示したものである。

天神山貝塚の「前期貝層」とラベリングされた試料2点は、4279-3945 cal BC, 4271-3939 cal BCの測定値を示した。第3表は、「遺跡発掘調査報告書放射性炭素年代測

第2表 天神山貝塚・山鹿貝塚 年代測定結果

No.	遺跡名	収蔵ラベル	試料	測定番号	年代測定結果 (2σ 暦年代範囲)
1	天神山貝塚	天神山貝塚 前期貝層 30×30×20ブロック 740324 ハマグリ (R) 54個	ハマグリ右殻	PLD-51305	4279-3945 cal BC (95.45%)
2	天神山貝塚	天神山貝塚 前期貝層 30×30×20ブロック 740324 ハマグリ (L) 45個	ハマグリ左殻	PLD-53064	4271-3939 cal BC (95.45%)
3	天神山貝塚	天神山貝塚 第5層 30×30×10ブロック 740324 ハマグリ (R) 24個	ハマグリ右殻	PLD-51306	2670-2279 cal BC (95.45%)
4	天神山貝塚	天神山貝塚 第5層 30×30×10ブロック 740324 ハマグリ (L) 25個	ハマグリ左殻	PLD-51307	2609-2224 cal BC (95.45%)
5	天神山貝塚	天神山 第4層 30×30×30 740323 No.2 ハマグリ (L) 61	ハマグリ左殻	PLD-51308	2676-2283 cal BC (95.45%)
6	天神山貝塚	天神山貝塚 第4層 30×30×30 740323 No.2 ハマグリ (R) 58個	ハマグリ右殻	PLD-53065	2696-2301 cal BC (95.45%)
7	山鹿貝塚	山鹿貝塚 第2層 Fトレ B貝塚	ハマグリ右殻	PLD-53066	2353-1916 cal BC (95.45%)
8	山鹿貝塚	山鹿貝塚 第2層 Fトレ B貝塚	ハマグリ右殻	PLD-53067	2410-2021 cal BC (95.45%)

第3表 年代測定データ一覧

時期	土器型式	cal BC	遺跡名	時期	土器型式	cal BC	遺跡名
早期末	轟2式	5,331	湯屋原遺跡	中期前半	春日式	2,623	西畑瀬遺跡
前期前半	轟B式	5,212	一陣長崎鼻遺跡	中期前半	春日式	2,571	上水流遺跡
前期前半	轟B式	4,936	湯屋原遺跡	中期末	阿高式	2,512	中尾田遺跡
前期前半	轟B式	4,717	九郎遺跡	中期末	阿高式	2,339	南田代遺跡
前期前半	轟B式	4,681	西畑瀬遺跡	中期末	阿高式	2,276	中尾田遺跡
前期前半	轟B式	4,497	三角山I遺跡	後期前半	坂の下式	2,203	東畑瀬遺跡
前期前半	轟B式	4,250	西畑瀬遺跡	後期前半	南福寺式	2,133	山ノ中遺跡
前期前半	轟B式	3,985	中川原遺跡	後期前半	岩崎式	2,282	宮ノ上遺跡
前期前半	轟B式	3,948	二日市洞穴	後期前半	岩崎式	2,200	宮ノ上遺跡
前期前半	轟B式	3,493	湯屋原遺跡	後期前半	岩崎式	2,193	宮ノ上遺跡
前期前半	轟B式	820	湯屋原遺跡	後期前半	指宿式	2,297	宮ノ上遺跡
前期前半	轟4式	3,758	上伊良原榎遺跡	後期前半	指宿式	2,136	山ノ中遺跡
前期前半	轟5式	3,977	上伊良原榎遺跡	後期前半	指宿式	2,136	山ノ中遺跡
前期後半	曾畑式	4,841	向田遺跡	後期前半	指宿式	2,133	山ノ中遺跡
前期後半	曾畑式	4,037	一湊松山遺跡	後期前半	指宿式	2,035	芝原遺跡
前期後半	曾畑式	3,961	一湊松山遺跡	後期前半	指宿式	1,880	山ノ中遺跡
前期後半	曾畑式	3,797	一湊松山遺跡	後期前半	御手洗A式	2,468	中川原遺跡
前期後半	曾畑式	3,766	三角山I遺跡	後期前半	市来式	2,287	干迫遺跡
前期後半	曾畑式	3,512	桐木耳取遺跡	後期前半	市来式	1,952	下鶴遺跡
前期末～中期中頭	深浦式	3,511	中ノ原遺跡	後期前半	市来式	1,896	干迫遺跡
前期末～中期中頭	深浦式	3,366	上水流遺跡	後期前半	市来式	1,886	下鶴遺跡
前期末～中期中頭	深浦式	3,332	宮ヶ原遺跡	後期前半	市来式	1,881	干迫遺跡
前期末～中期中頭	深浦式	3,085	堂園平遺跡	後期前半	丸尾式	2,199	干迫遺跡
前期末～中期中頭	深浦式	2,919	仁田尾遺跡	後期前半	丸尾式	1,881	下鶴遺跡
前期末～中期中頭	深浦式	3,089	上水流遺跡	後期前半	丸尾式	1,872	干迫遺跡
前期末～中期中頭	深浦式 日木山	3,101	上水流遺跡	後期前半	鐘崎式(粗製)	2,011	西畑瀬遺跡
中期前半	船元II式	3,376	北大久保A遺跡	後期前半	辛川式	1,608	干迫遺跡
中期前半	船元II式	3,352	上水流遺跡	後期後半	西平式	1,625	干迫遺跡
中期前半	船元式	3,511	上水流遺跡	後期後半	西平式	1,517	釘野千軒遺跡
中期前半	船元式	3,369	上水流遺跡	後期後半	西平式	1,510	釘野千軒遺跡
中期前半	船元式	3,360	上水流遺跡	後期後半	西平式	1,607	下鶴遺跡
中期前半	船元式	3,102	九郎遺跡	後期後半	西平式	1,509	下鶴遺跡
中期前半	船元式	3,099	上水流遺跡	後期後半	西平式	1,505	玉名平野条里跡
中期前半	船元式	3,076	桐木耳取遺跡	後期後半	西平式	1,414	玉名平野条里跡
中期前半	船元式	2,906	上水流遺跡	後期後半	太郎迫式	1,510	西畑瀬遺跡
中期前半	本野タイプ	3,511	北大久保A遺跡	後期後半	三万田式	1,438	大野遺跡
中期前半	上水流タイプ	3,210	北大久保A遺跡	後期後半	中岳式	1,283	西原遺跡
中期前半	春日式	2,902	桐木耳取遺跡	後期後半	中岳式	1,256	西原遺跡
中期前半	春日式	2,894	上水流遺跡	後期後半	御領式	1,260	西畑瀬遺跡
中期前半	春日式	2,849	上水流遺跡				

定データベース」をもとに、九州縄文時代前期～後期の年代測定データを収集し、かつ、Intcal20で暦年校正を行った年代値を表にしたものである(福永2022)。第3表から判断すると、天神山貝塚の「前期貝層」とラベリ

ングされた試料2点の年代値は、縄文時代前期の轟B式に概ね相当することがわかる。上述のとおり、天神山貝塚の前期遺物包含層(10・11層)からは轟B式が出土しており、年代測定結果と大きな矛盾はない。

また、「5層」とラベリングされた試料2点は、2670-2279 cal BC, 2609-2224 cal BC の測定値を、「4層」の試料2点は、2676-2283 cal BC, 2696-2301 cal BC の測定値を示した。第3表から判断すれば、概ね縄文時代中期末～後期初頭に相当する。4層・5層は縄文時代後期初頭～前葉の遺物包含層であるが、縄文時代中期末の並木式と考えられる土器小片が1点確認されており、報文中では遺跡内に縄文時代中期の包含層が存在する可能性も言及されている（前川編1974）。

山鹿貝塚の「2層 Fトレ B貝塚」とラベリングされた試料2点は、2353-1916 cal BC, 2410-2021 cal BC の測定値を示した。発掘調査成果報告書の中で、縄文時代後期貝層（A-2区上層貝層）から出土したハマグリを対象に年代測定を実施しており、較正はされていないが3376±150年 B.P. という値が示されている（永井ほか編1972）。分析対象試料を抽出した貝層が違うことや、分析精度の問題などもあり、単純に結果を比較することはできないが、今回の年代測定結果は、以前示された年代値よりも古い値を示し、第3表から判断すれば、概ね縄文時代中期末～後期前葉に相当しよう。

4. 若干の考察

天神山貝塚の収蔵貝類資料を検討した結果、縄文時代後期の5層・4層・3層において貝類構成に差異が認められた。これらの差異は、採集時期（季節）の違いを反映している可能性がある。これまで、天神山貝塚の貝層間に認められる貝種構成の変異は、海進・海退などの自然環境の変化によって生じたものと考えられており（山崎1975b）、本稿では先学とは異なる解釈を提示したことになる。

放射性年代測定の結果、5層の試料2点は、2670-2279 cal BC, 2609-2224 cal BC の測定値を、4層の試料2点は、2676-2283 cal BC, 2696-2301 cal BC の測定値を示しており、両層間で年代差は認められない。この測定結果を見る限り、5層・4層は比較的近い、あるいはほぼ同時期に形成されたと想定できる。その場合、両層に認められる貝種構成の差異について、海進・海退という中・長期的な要因を想定するよりは、採集時期（季節）の違いを反映しているとみる方が、より妥当性は高いと考え

られる。しかし、年代測定を行った試料数も少なく、現状のデータのみでは、貝層形成時期の評価は難しいことも確かである。今後、貝採集季節の推定に有効と考えられる出土貝類の貝殻成長線分析の実施や、同層から出土した魚骨など、当時の生業活動を反映するような貝類以外の資料を分析することで、検証作業を続けていく必要があるだろう。

次に山鹿貝塚の分析結果について述べたい。第2・3次発掘調査で検出された縄文時代後期の層は、鐘崎式・北久根山式併行期（「山鹿XII」・「山鹿XIII」）の土器群が主体を占め、埋葬人骨の時期もこの時期と推定されている（永井ほか編1972）。しかし、上述のとおり、今回の年代測定結果は、概ね縄文時代中期末～後期前葉の年代値を示しており、報文中の後期堆積層の推定年代よりも、やや古い値となっている。

確かに、山鹿貝塚からは、縄文時代中期末の並木式・阿高式や、縄文時代後期初頭の中津式・坂の下式はそれほど多くの出土は認められず、報告書掲載土器図面でも、後期前葉～中葉の小池原上層式・鐘崎式・北久根山式が目立つ。報文中で縄文時代後期の層を鐘崎式・北久根山式併行期（「山鹿XII」・「山鹿XIII」）と推定したのも、こうした出土土器の様相を踏まえてのことであろう。

一方で、山鹿貝塚の採集資料の中には、縄文時代後期初頭～前葉の中津式・福田K2式に伴う粗製土器と考えられる屋敷式（中村2005）が多く存在している（福永2018）。採集品も含めた資料状況と今回の年代測定結果を踏まえれば、山鹿貝塚において、縄文時代後期初頭～前葉の人々の活動痕跡も無視し得ない。発掘調査成果報告書の文章・図面によって、「山鹿貝塚の縄文時代後期貝層や埋葬人骨の年代＝鐘崎式・北久根山式併行期」とする漠然としたイメージが形成されてきた感がある。しかし、今回の年代測定結果などから判断する限り、後期貝層や埋葬人骨の年代に関しては今後より慎重な評価・検討が必要であると考えられる。

おわりに

九州大学総合研究博物館に収蔵されている、天神山貝塚・山鹿貝塚出土貝類を対象として、出土貝類の構成や貝類採集活動について検討し、さらに、貝類資料の一部

に関して放射性炭素年代測定を実施した。残された課題は多いものの、天神山貝塚・山鹿貝塚ともに、新たな知見を得ることができた。既報資料ではあるものの、その再検討を行う意義を改めて感じた次第である。

九州大学総合研究博物館には、長崎県カラカミ遺跡や佐賀県小川島貝塚、福岡県前田山遺跡、熊本県天岩戸岩陰遺跡、同県若園貝塚などから出土した貝類・動物骨・魚骨といった自然遺物がまだ眠っている。今後、これらの資料の再検討も進めていきたい。

註

- 1 発掘調査報告書に掲載されている各貝種の個体数と、収蔵資料の個体数は一致しない点がかかる。とはいえ、後述する資料の収蔵状況からは整理・報告作業を実施したことが推察され、これらの資料は各発掘調査報告書の中でデータ公表された資料である可能性が極めて高いと考えられる。
- 2 ラベルにある「B貝塚」については、発掘調査報告書（永井ほか編1972）の記述でも確認できず、詳細は不明である。第4図の土層注記に「II h 混貝黒褐色砂層（A貝層）（完形貝を含む）」とあり、「B貝塚」という記載と何か関連があるのかもしれないが、よくわからない。
- 3 発掘調査報告書（永井ほか編1972）の中では、「Fトレンチ」と「F区」が混在して用いられている。両者は同義と考えられ、本稿では収蔵資料に付されたラベルに「Fトレ」と記載されていることもあり、「Fトレンチ」の呼称で以下記述する。
- 4 年代測定は、株式会社パレオ・ラボに分析を依頼した。なお、暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ：Marine20）を使用し、分析試料は海洋性のハマグリということで、海洋リザーバー効果に対する較正も行っている。

引用文献

奥谷喬司（編・監修）1986『生物大図鑑・貝類：決定版』世界文化社

- 奥谷喬司（編著）2000『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版会
 奥谷喬司（編著）2017『日本近海産貝類図鑑 第二版』東海大学出版部
 木村幾多郎 1980「総括——自然遺物よりみた新延貝塚の漁撈、狩猟活動について」『新延貝塚』鞍手町埋蔵文化財調査会、pp.129-135.
 木村幾多郎 1987「北部九州の漁撈活動」『文明のクロスロード：Museum Kyushu』第24号、博物館等建設推進九州会議、pp.9-18.
 木村幾多郎 1994「北部九州の狩猟・漁撈活動」『九州の貝塚——貝塚が語る縄文人の生活——』北九州市立考古博物館、pp.14-23.
 田中良之 1985「北九州の縄文時代」『北九州市史 総論 先史・原始』北九州市、pp.293-334.
 永井昌文・前川威洋・橋口達也（編）1972『山鹿貝塚』山鹿貝塚調査団
 中村友博 2005「屋敷式土器について」『やまぐち学の構築』創刊号、pp.1-18.
 福永将大 2018「福岡県遠賀郡芦屋町山鹿貝塚採集の土器資料——船津常人氏収集資料（1）——」『九州考古学』第93号、pp.101-110.
 福永将大 2022「玉泉館旧蔵資料の研究——福岡県みやま市下楠田貝塚出土の土器資料について——」『九州大学総合研究博物館研究報告』第19号、pp.17-26.
 前川威洋（編）1974『天神山貝塚』志摩町文化財調査報告書第1集、志摩町教育委員会
 山崎純男 1975a「九州地方における貝塚研究の諸問題——特に自然遺物（貝類）について——」『九州考古学の諸問題』福岡考古学研究会、pp.129-165.
 山崎純男 1975b「縄文時代遺跡の地域的検討——福岡県糸島半島の貝塚について——」『熊本史学』第46号、熊本史学会、pp.1-14.
 山崎純男 2007「九州縄文時代生業活動の展開」『第17回九州縄文研究会福岡大会 九州における縄文時代早期前葉の土器相 発表要旨・資料集』九州縄文研究会、pp.1-11.
 山田克樹・吉田浩之（編）2002『山鹿貝塚（第5次調査）』芦屋町文化財調査報告書第14集、芦屋町教育委員会

Received Dec. 29, 2024; accepted Jan. 21, 2025

Shellfish Materials Excavated from Tenjinyama Shell Mound and Yamaga Shell Mound

—Materials from the Kyushu University Museum Collection—

Masahiro FUKUNAGA, Yasuhiro ITO

The Kyushu University Museum, Hakozaki 6-10-1, Higashi-ku, Fukuoka, 812-8581, Japan

Shellfish materials excavated from Tenjinyama Shell Midden and Yamaga Shell Midden in Fukuoka Prefecture, Japan, which are housed in the Kyushu University Research Museum, were reviewed. While identifying the excavated shell species, we also reviewed the habitats and ecology of the excavated shells, and discussed the shellfish collecting activities at the two sites. In addition, some of the shellfish materials were radiocarbon dated, which provided important data on the timing of shell mound formation at the two sites.

Key words: the Kyushu University Museum Collection, report of materials, Tenjinyama Shell Mound, Yamaga Shell Mound, Jomon period

